ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

第 63 号
2019. 5.31

目　次

●ごあいさつ ―開館 30 周年を迎えて―・・・・・・・・ 1
●開館 30 周年事業紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
今年度のイベント・事業・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
ロビー展「ひめゆり平和祈念資料館の 30 年」・・・・・・・ 3
遺族対象「戦跡フィールドワーク―ひめゆり学徒隊の足あと」・・ 5
●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
映像作品コンテスト開催／日本平和博物館会議に参加／「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」学習会実施／「ひめゆりガイド講習会」開催／報道機関を対象にした研修を初開催
●統計に見る 2018 年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
●仲宗根政善日記抄（59）・・・・・・・・・・・・・・・・・11
●本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
● 30 周年に寄せて ―証言員の声―・・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

ひめゆり、新しい世代へ
ひめゆり平和祈念資料館
HIMEYURI PEACE MUSEUM
開館30周年

ごあいさつ－開館 30 周年を迎えて－

館長　普天間朝佳

ひめゆり平和祈念資料館は、今年の 6 月 23 日、開館 30 周年を迎えます。30 年という歳月を刻むことができたのも、多くのみな様方の温かいご支援の賜だと心より感謝しております。

この節目に、資料館では「ひめゆり、新しい世代へ」をテーマに掲げ、様々な事業やイベントを計画しております。まず、1 月 1 日からロビー展「ひめゆり平和祈念資料館の 30 年」をスタートしました。2 月 1 日には資料館を紹介する映像を初めて制作し YouTube で公開しました。2 月 18 日にはひめゆりの塔入口に開館 30 周年記念バナー（横断幕）を設置し記念ロゴを発表、さらに 4 月 6 日にはご遺族を対象に戦跡フィールドワークを実施しました。今後は 6 月 29 日に「ドキュメンタリー上映とトーク」イベントの開催、来年 2 月 29 日に一般の方々を対象にした戦跡フィールドワークの実施、3 月末に記念誌の発行などを予定しております。

また記念事業の一環として、来年 7 月を目標に「開館 30 周年記念リニューアル」を計画しています。今、資料館に来館される方々は、祖父母の方々を含め周りにほとんど戦争体験者がいない世代、いわば「戦争からさらに遠くなった世代」になっています。リニューアルはそのような世代にもしっかり伝わるような展示を目指し、検討を重ねています。

今年の 4 月末で平成という時代が終わりました。振り返ってみれば、当館にとって平成という時代は、体験者の元ひめゆり学徒たちが資料館を開館し、その後 30 年間、多くの方々に戦争体験を伝えて来た歳月だったと言えます。そして、これから迎える新しい時代は、私たち戦後世代が体験者から受け継いできたものを次の世代へ橋渡ししていく時代になっていきます。この大きな節目に、職員一同、体験者から受け継いできた「戦争を絶対に起こしてはならないという思い」を改めて胸に刻み、様々な活動に取り組んでいきたいと考えています。

◆開館 30 周年事業紹介

今年は、開館 30 周年のテーマ「ひめゆり、新しい世代へ」のもと、資料館の歩みを振り返り、また次世代につなげていくための様々なイベントや事業を予定しています。2019 年 1 月 21 日に、沖縄県庁記者クラブにおいて、館長の普天間朝佳と学芸員前泊克美が、30 周年の意義や取り組みについて多くの方々に知って頂くために、報道各社への記者発表を行いました。ここでは、すでに実施したものも含めてご紹介します。

①記念ロゴマーク決定 & 30 周年バナー設置

30 周年記念のロゴは、百合をモチーフにした既存のロゴに、30 周年テーマ「ひめゆり、新しい世代へ」を掲げ、新しい世代への継承、未来への飛躍、平和が続いていくという意味を込めました。資料館の活動を新しい世代が受け継ぎ、未来へ繋げていく、平和が続いていくことを表現しています。また、訪れる方々に 30 周年を広く知って頂こうと、ひめゆりの塔入口に「ひめゆり平和祈念資料館　開館 30 周

年」のバナーを設置いたしました。

②紹介ムービー制作

視聴はこちら→

開館 30 周年記念に、資料館を紹介するムービー（約 3 分）を初めて制作しました。

近年、小学生を伴ったご家族での入館が目立つようになっています。戦争や平和について知りたい、子どもにも学んでほしいと考える 30 ～ 40 代の親御さん世代に焦点を当て、「家族で一緒に学べる資料館」であることがわかる映像を目指しました。制作は、映画監督の宮平貴子さんにお願いしました。2 月 1 日から YouTube で公開しています。

（https://www.youtube.com/watch?v=tQMTA5PucBs&feature=youtu.be）

今年度のイベント・事業

30 周年関連

① 2019 年 6 月 29 日　ひめゆりドキュメンタリー映像上映とトーク（仮）

ひめゆり平和祈念資料館をテーマにしたドキュメンタリー番組を上映し、資料館職員や関係者が当時のエピソードを語り、参加者と一緒に 30 年前をふりかえります。@ひめゆりピースホール

←上映映像の一場面

② 2020 年 2 月 29 日予定
戦跡フィールドワーク―ひめゆり学徒隊の足あと

ひめゆり学徒隊の足あとを資料館の職員による解説でたどります。
参加者は、一般の方から公募します。@那覇市安里―糸満市伊原

↓戦後 70 年の戦跡フィールドワーク

③ 2020 年 3 月　開館 30 周年記念誌　発刊

資料館 30 年の歩みをふりかえる記念誌を発行します。

④ 2020 年 7 月予定　開館 30 周年記念リニューアル

2004 年以来 16 年ぶりにリニューアルを行います。年月の経過にともない「ひめゆりの塔」を知らない世代も出てくるなか「戦争からさらに遠くなった世代」に伝わる展示を目指し、多言語化などユニバーサルデザインの強化も進めます。
中高校生や平和学習に熱心な教員などへのヒアリングも行っています。

＊イベント

夏休み親子フィールドワーク
　―2019 年 7 月 27 日・8 月 10 日
教員向け講習会 ―2019 年 8 月 2 日
ガイド向け講習会 ―2020 年 3 月
アニメ「ひめゆり」特別上映会
　―春・夏・冬長期休み

↑教員向け講習会の様子

↓夏休み親子フィールドワーク

＊事業

1．ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業
　(1) 教育普及
　(2) ひめゆり学徒と沖縄戦の資料収集・整理保存・調査研究
　(3) ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行　(4) その他
2．ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業
3．ひめゆり平和研究所―" ひめゆり " を伝える映像作品コンテスト（助成事業）

＊出版

『感想文集ひめゆり 第 30 号』『年報第 30 号』「資料館だより」第 63 号、第 64 号

開館 30 周年記念ロビー展「ひめゆり平和祈念資料館の 30 年」

2019 年 1 月 1 日～ 2019 年 12 月 31 日

開館 30 周年のスタートを飾ったロビー展です。資料館建設から開館、戦跡めぐり、2004 年のリニューアル、戦争体験のない職員への引き継ぎまで、資料館の 30 年の歩みを 9 枚の写真パネルでたどっています。

30 周年を迎えたひめゆり平和祈念資料館

ひめゆり平和祈念資料館は、今年で開館 30 周年を迎えました。

1989 年 6 月 23 日の開館以来、2200 万人を超える方にご来館いただきました。

資料館で活動してきた元ひめゆり学徒と職員　2018 年 2 月 6 日

資料館建設に立ち上がるひめゆり同窓会

戦後長い間、元ひめゆり学徒の多くは戦争体験を語れませんでした。しかし 40 年近くを経て、資料館の建設に向けて立ち上がります。

ひめゆりの塔の壕の公開許可を求める署名運動　1988 年 4 月 10 日

ひめゆり平和祈念資料館 開館

元ひめゆり学徒は交替で展示室に立ち、直接、戦争体験を語り始めました。亡くなった友達のためにも、自分たちが沖縄戦を伝えなければと思ったのです。

来館者に説明する証言員の宮城喜久子　1994 年

自分たちの手で戦跡めぐりを実施

ひめゆり学徒隊が沖縄戦でたどった道のりや壕をめぐるバスツアー。企画から参加者募集、当日の案内まで、自分たちの手で行いました。

山城本部壕の状況を語る証言員の比嘉文子　1991 年 3 月 31 日

全ての学徒隊の体験を伝える展示会

開館 10 周年に、全ての男女学徒隊をテーマにした展示会を初めて開催。
期間中は、他の学徒隊の体験者も交替で説明を行いました。

一中鉄血勤皇隊の石川榮喜さん　1999 年 6 月 24 日

リニューアル前の第一展示室
沖縄戦前夜

リニューアル後の第一展示室
ひめゆりの青春

いつか語れなくなっても伝わる展示を

元ひめゆり学徒は、自分たちが直接戦争体験を語れなくなっても、若い世代に伝わる展示をめざして、全面的な展示リニューアルを実施しました。

リニューアル・オープン　2004 年 4 月 13 日

アニメと絵本で子どもたちに伝える

子どもたちに言葉だけで沖縄戦を伝えるのは難しいと感じていた元学徒は、原画作者や職員とともに、6 年がかりでアニメと絵本をつくりあげました。

2011 年『絵本　ひめゆり』刊行
2012 年アニメ「ひめゆり」完成

戦争体験のない職員による講話 スタート

戦後 70 年目には、元学徒の講話を引き継ぎ、長年一緒に働いてきた職員による講話が始まりました。

講話を行う説明員の仲田晃子　2017 年 6 月 13 日

戦争体験者から非体験者へ

元ひめゆり学徒の島袋淑子館長（90）が退任。
非体験者の普天間朝佳が館長に就任し、資料館は新しい一歩を踏み出しました。

2018 年 3 月 30 日

開館 30 周年事業

遺族対象「戦跡フィールドワーク―ひめゆり学徒隊の足あと」

2019 年 4 月 6 日、開館 30 周年事業のひとつとして、沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒、教師のご遺族を対象にした「戦跡フィールドワーク―ひめゆり学徒隊の足あと（バスツアー）」を実施しました。戦跡めぐりはこれまでにも実施してきましたが、ご遺族対象での開催は初めてのことです。戦跡をたどることで亡くなった方をしのび、平和への思いを新たにすること、戦跡フィールドワークを通して、ご遺族と資料館職員との交流をもちたいという目的での実施となりました。

11 歳から 90 歳まで、55 名の参加者がありました。女師・一高女跡である栄町（那覇市）、沖縄陸軍病院跡（南風原町・黄金森）、アブチラガマ（南城市・糸数分室壕）、伊原第一外科壕／伊原第三外科壕・ひめゆりの塔（オプションツアー）など、ひめゆり学徒隊の足跡を、職員による案内でたどりました。

すでに学徒のご両親の世代はなく、弟さん、妹さんの参加が見られる中、甥や姪、弟さん、妹さんの子や孫などの若い世代の参加もあり、ご遺族の世代も変わっていることがわかりました。参加した若い世代からの、もっと知りたい、学びたいという気持ちも伝わってくるフィールドワークとなりました。

資料館では証言員５人が皆さんをお迎えしました。ご遺族から、亡くなった方の人柄が知りたい、ひめゆり学徒隊はなぜ動員されたのか、などの質問があり、証言員が自身の体験を交えながら、丁寧に質問にこたえていきました。特に、亡くなった引率教師についての話では、多くの教え子を連れて戦場を逃げ惑った状況に加えて、「先生方も大変なご苦労があったと思う」という生存者の声に、ご遺族が涙する場面もありました。

参加者アンケートには、フィールドワークを開催してくれてよかった、という肯定的な意見が多数見られました。ひめゆり学徒隊の足跡をたどったことへの感想のほか、「生存者にお会いでき、亡くなったきょうだい（父・祖父・おじ・おば）のことを直接聞くことができてよかった」という声が複数寄せられました。

証言員からは、毎年慰霊祭でお顔を会わせながらもなかなかゆっくり話す機会もなかったので、今回ご遺族とお会いして、友達や先生のことを伝えることができて本当によかった、という感想がありました。また、資料館とご遺族双方から、「もっと早くこういう場を持ったら良かった」という声がありました。

2020 年２月には、一般の方対象の戦跡フィールドワークを開催予定です。

ご遺族・証言員ともに亡くなった友達・家族への思いを共有する場となりました

☆★☆参加者の声★☆★

生存者の証言（お話）を直接拝聴することが出来、当時の職員（教師）の愛情のこもった対応などを知ることが出来てよかった。（81 歳 男性 弟）

（叔母は）解散命令後喜屋武付近で母や兄弟等と自決と聞いているが詳しく知りません。叔母のことについて知りたいので、同窓生の中で知っている方がいましたら何でもいいですから教えて下さい。（66 歳 男性 甥）

（叔母が）とてもつらい状況だったのだろうなと改めて感じることができた。（姪）

学校からひめゆりの塔までどのルートで歩いてきたのかとても知りたかったので本当によかった。（52 歳　姪）

思いを共有し同じ時間を共有出来たことを幸せに思います。おばの思い出をお持ちの方がいらっしゃらない事だけが残念です。（51 歳 女性 姪）

「ひめゆり学徒隊」というまとまった形ではなく１人１人の生きていたことを実感できました。そういう説明、お話を続けていって欲しいです。（59 歳　姪の友人）

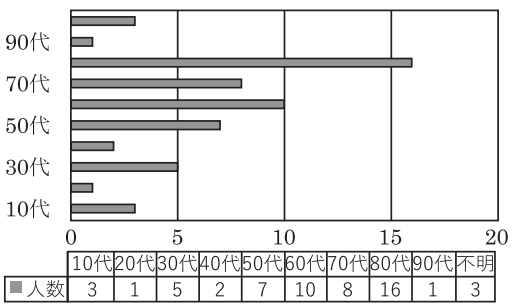
教育の怖さ大切さを教えられました。後世に伝える事の大切な事を一層思いました。（72 歳 男性 甥）

アブチラガマでの係の方の気遣いが大変よかった。（81 歳 女性 義妹）

ガマに入ることが人生で初めてだったので、戦時中に使用していたガマに入れたのは、とても興味深い貴重な体験ができ感慨深かったです。（33 歳　女性　兄の孫）

こういう機会がないと壕に入ったり生き残った方々と直接お話しすることはなかったと思います。（37 歳 女性 孫）

年代別参加者数



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
■人数	3	1	5	2	7	10	8	16	1	3

写真でたどる～「戦跡フィールドワーク－ひめゆり学徒隊の足あと」

南風原黄金森・悲風の丘までのぼる参加者

丘にのぼらない方は麓で説明を聞きました

陸軍病院壕があった場所を確認しました

ガマに入らない方は、館長普天間による説明を聞きました

アブチラガマ（糸数分室）入口

交流の時間
at 資料館多目的ホール

資料館のホールでは、ご遺族と職員・証言員（本村つる、仲里正子、謝花澄枝、島袋淑子、知念淑子）との交流の時間を設けました。

ご遺族とお会いするのを心待ちにしていました

交流の時間が終わっても、ご遺族と証言員との話は尽きない様子でした

資料館トピックス

◆映像作品コンテスト開催

特別賞を受賞した「平和へのヒッチハイク」

選考委員会の様子

2018 年度、ひめゆり平和研究所では、新たな平和教育の取り組みとして、「“ひめゆり”を伝える映像作品コンテスト」を開催しました。

本企画は、沖縄戦から 70 年以上が経ち、戦争を体験した世代が少なくなっていく中で、「次世代にひめゆり学徒隊や沖縄戦を伝えるために何ができるだろう」という趣旨で行なっています。第 1 回目は、「ひめゆり学徒隊」をテーマに、表現方法は自由というかたちで募集を行いました。残念ながら、ひめゆり平和賞の該当作品は出ませんでしたが、若者が伝えたい平和のメッセージや、選考委員の方々の映像に対する真摯な姿勢などを間近に見聞きすることができ、平和研究所にとっても、新たな発見のある取り組みとなりました。

現代では欠かせない情報発信手段となった映像・動画の制作を通して、多くの方々に、学び、考え、発信する機会となることを願っています。

本コンテストは、2019 年度も開催予定です。みなさまのご応募お待ちしております。

①コンテストの結果はこちら　http://www.himeyuri.or.jp/JP/etc/01_movie_contest.pdf →

②特別賞作品「平和へのヒッチハイク」視聴はこちら

→ https://www.youtube.com/watch?v=QGMsD3R2toY&feature=youtu.be

◆日本平和博物館会議に参加

日本平和博物館会議での議論の様子

2018 年 11 月 8 ・ 9 日、ピースおおさかで開催された「第 25 回平和博物館会議」に、館長の普天間朝佳が出席しました。今回は①戦争体験の継承に新技術を活用することについて、②現代社会の実状を踏まえた情報発信・展示の在り方について、③若者を対象にした取り組みについて、主体的な平和教育の方法について、④子ども・親子・児童等向けのプログラムの推進についての 4 つの協議題について話し合われ、いずれの協議題についても活発な意見が交わされました。①については新技術の導入のメリット、デメリットの報告があり、導入の可否は展示内容によって判断したほうがよいという共通認識に至りました。

②から④については各館のさまざまな取り組みが報告されました。

◆「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」学習会実施

2019 年 1 月 26 日､9 月に引き続き､「沖縄県地域通訳案内士スキルアップ研修」学習会を実施しました。今回は、中国語の通訳案内士の 32 人が参加しました。職員による展示ガイドツアー、沖縄戦についてのガイダンスを実施しました。また、ひめゆり学徒生存者がなぜ沖縄戦を伝えてきたのかが伝わる映像として「ひめゆりの証言員たち」を視聴し、その後、感想・意見交流を行いました。外国人観光客の案内

を行う方々に、ひめゆり学徒隊や沖縄戦を知ってもらうだけではなく、2020 年に予定している展示リニューアルに向けての様々なご意見を頂く機会にもなりました。

◆「ひめゆりガイド講習会」開催

2019 年 3 月 16 日、バスガイド、平和ガイドを対象とした「ひめゆりガイド講習会」を開催し、58 人の参加がありました。資料館職員によるひめゆりの塔や展示室のガイドツアー、沖縄戦やひめゆり学徒隊に関する概要説明などを行いました。質疑応答では、証言員（元ひめゆり学徒）の仲里正子も参加し、沖縄戦当時の体験を交えて応答していました。体験者の高齢化により沖縄戦の体験を直接聞く機会が少なくなっている中で、貴重な機会となったようです。

通常は案内する立場のガイドの皆さんですが、展示をしっかり見学し、向き合う時間にもなったようで、「（案内する）お客さんが、もっと見学する時間がほしい、というのがわかるね」などの声が聞かれました。

参加者の質疑応答に応える仲里正子証言員

◆報道機関を対象にした研修を初開催

2019 年 3 月 26 日、報道機関を対象に、「琉球新報・沖縄タイムス新入社員研修」を実施しました。初めての開催ということもあって若手・中堅記者も参加を希望し、新人を含む 28 人が集まりました。講義形式ではなく、写真を読み解くワークショップ「フォトランゲージ」、展示ガイドツアー、ビデオ視聴、意見交換などを行いました。

参加者からは、体験者の思いを知ることができた、新たな発見があった、自分の考えを言葉にしたり、他の参加者の意見をじっくり聞けたりしてよかった、沖縄の記者として沖縄戦を伝える責任を感じた、などの感想が寄せられました。

沖縄戦の記憶を伝えるために、メディアが果たす役割は非常に重要です。しかし、現場で取材する記者の側も世代が変わってきているうえ、担当の入れ替わりもあります。こうした中で、今回、報道機関と合同で研修を行ったことには大きな意義があると考えています。

ひめゆりの塔周辺のガイドツアー

「フォトランゲージ」で写真に向き合う参加者

統計に見る2018年度

※小数点第 1 位を繰り上げているため、合計が 100%でない場合もある。

1．入館者状況（有料）

＊2018 年度入館者数

530,087 人

2017 年度 555,546 人より－25,459 人

うち外国人 6,480 人、前年比＋587 人

＊開館以来 30 年間で 29 番目の入館者数。平均入館者：44,174 人／ 1 か月、1,414 人／ 1 日。
→ただし、慰霊の日、台風休館 1 日を除く 362 日。

＊開館以来 30 年間の累計は 22,724,247 人で、年平均入館者数は 757,475 人、 1 日平均は 2,103 人。
→ただし、1989 年度の開館期間は 9 か月間。

2．入館料免除

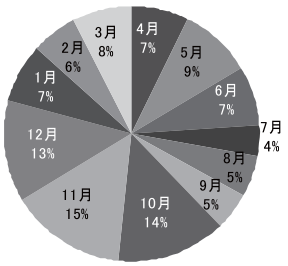
32,706 人

＊団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	136 団体	6,422 人
＊学校団体引率者		18,126 人
＊修学旅行下見	561 校	1,587 人
＊個人免除者（身障者手帳等提示の方）		4,302 人
＊慰霊の日（ 6 月 23 日）		2,269 人

※沖縄県内学校団体は入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。
ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

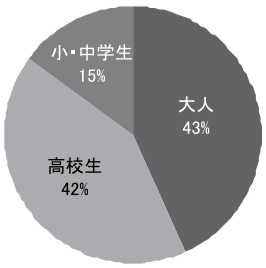
3．月別・類別入館者状況

① 月別入館者数



＊入館者が多い時期：10 ～ 12 月
高校生修学旅行シーズン。
3 か月間 計 220,339 人（総入館者数の 42%）
＊入館者が少ない時期：7 ～ 9 月
3 か月間 計 73,802 人（総入館者数の 14%）

② 類別入館者数（個人・団体含む）



＊類別割合：大人 43%、高校生 42%、小・中学生 15%
＊30 年間平均:大人 63%、高校生 25%、小・中学生 12%
＊高校生、小・中学生の団体の割合は、それぞれ 95%、66%
＊団体：高校生が最も多く 68%、小・中学生 19%、大人 13%

4．学校団体入館状況

2018 年度の修学旅行等学校団体入館数は 1,915 校、279,621 人。2017 年度の 2,026 校、286,711 人に比べ－111 校、－7,090 人。小学校 91 校で 5%、中学校が 574 校で 30%、高校が 1,250 校で 65%。

①都道府県別 BEST 3 ☆☆☆

	1 位☆	2 位☆☆	3 位☆☆☆
小学校	沖縄　37 校	鹿児島　22 校	東京　　6 校
中学校	大阪　82 校	岡山　　63 校	兵庫　61 校
高　校	東京 188 校	神奈川 118 校	埼玉　96 校

＊全体に占める沖縄の中学・高校の割合は中学 2%、高校 0.6%。

②入館校数月別 BEST 3 ☆☆☆

	1 位☆	2 位☆☆	3 位☆☆☆
小学校	6 月　22 校(24%)	5 月　15 校(16%)	10 月　13 校(16%)
中学校	5 月 246 校(43%)	4 月 112 校(20%)	6 月　84 校(15%)
高　校	10 月 278 校(22%)	11 月 273 校(22%)	12 月 251 校(20%)

＊高校生の入館は 10 月～ 12 月の 3 か月間で全体の 64%。

仲宗根政善日記抄（59）

開館 30 周年の節目に、仲宗根政善日記の中から資料館建設に触れた箇所をご紹介します。

〔1983 年〕一月八日

嶺井百合子さんと糸数菊さんが突然訪ねて来られた。ひめゆり資料館の件であった。会館建設に熱意を持っておられる。源会長が足をいためて入院しておられるので、その代理で来られたという。あの会長の熱意にはおこたえしなければならないと緊張の面持ちである。資料館建設が、同窓会総会できまった以上は、如何なる困難があろうと、ぜひ実現するとはりきっておられる。とくに糸数菊子さんは、ご主人をこの戦争で失っておられる。田代秀子さんとお二人が、いわばこの運動をもりあげたともいえる。

喜屋武海岸に追いつめられて、もう最後だという時、誰も知られず巌かげに朽ちはててしまう孤独感はたえるにたえられなかった。亡くなって行った方々すべてがああしたたえられない孤独感を抱いてこの世を去っておられるにちがいない。生き残ったわれわれはたえず彼らを思い浮べしのんであげなければならない。石碑に氏名を刻むことはあるいはうつろなことかもしらぬ。文字そのものが人の心をはなれて、人間と離れて存在したとき、それはただ石のくぼみにすぎない。しかしそのわずかの石へのくぼみは、人間の心全体をたたえることも出来る。ひめゆりの塔におまいりする年老いた母親たちは、あの石碑をわが子の黒髪をなでさすように涙を流しながらなでている。ただの石の刻みではない。そこには娘がまだ生きているのではない。母の心の中に息をして生きているのである。死滅したといえようか。亡くなる時に乙女らが願っていたのは、いつまでも黒髪をなでさすってもらいたいのである。たとえ、身は屍となり朽ちはてたとしても、母の心の中にいきいきといきてさえおれば仕合せなのである。（中略）世の人々がいる間、ひめゆり塔のある間、この石ぶみを通して母親のように心をかよわせていただきたい。これが資料館の資料館たる所以である。これをもって平和の原点とする前に亡くなって行った人々のたえられない孤独の感をくみとることこそが大切であろう。

嶺井さん糸数さんを前にしていてしきりに喜屋武断崖に追いつめられて行って、死にぎりぎりに向かい合っていた時のことをばかりを考えていた。

〔1985 年〕十月二十一日

（前略）同窓会館から世嘉良さんからのお電話。□々、ひめゆり学徒隊の証言集を整理中との話であった。疎開した生徒も、他部隊に参加した生徒も加えるという話であったので、金城豊さんの記録をぜひとるように注文をつけた。電話で、金城さんの体験記録はすでに集録ずみとのことであった。

南風原陸軍病院に行った隊とは別に、地方部隊に参加した生徒の記録は、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』には一つもない。先日金城豊子さんが、証明書をとりに来たとき、私ははじめて他部隊に参加して活動した生徒の体験を聞いて驚いた。いわゆるひめゆり隊におとらぬ悲惨な体験をしていることをはじめて知った。これはどうしても書き残しておきたいと思っていた。金城さんには一人の祖父が家におられた。祖父一人を置きざりにして学友とともに南風原病院に行くことも出来なかった。思いきり祖父一人を残して大里の部隊の病院に勤務した。その後摩文仁米須へさがり解散後は大里城址、西原、中城と人々の後を追うて避難した。ついに野嵩で捕虜になったとか。幸、同級生上原当美子さんが、その録音テープを文字化していることを知った。

二十一日には十七名の資料委員が集まっていることを世嘉良さんが知らせてくれた。（中略）じっとしておれずすぐ出かけた。

ひめゆり同窓会館三階に上ると、廊下に箱を並べて、第一外科、第二外科、第三外科から先日掘り出した遺品が整然と整理されていた。この仕事だけでも大変な作業量である。

慰霊の間をのぞくと、資料委員十七名が頭をつけ合せて作業に熱中しているところであった。証言者の録音テープが一箱にぎっしりつまっていて、上原当美子さんが示してくれた。これを各自が分担して文章にする作業を今すすめているという。でももうその作業もほぼ山を越して、既に活字にされたものもあるといい、机の上に積んであった。今日まで皆が幾度集ったか知れない。その熱意に全く感激した。生き残りえたという喜びと責任からであろう。

終戦直後、生き残った者、皆からわれわればかり生き残りまことに申訳ないとわびていた。今もその

気持ちにかわりはなかろう。その作業ぶりを見ていると、その熱気にあっとうされるが、亡くなった人々に相すまない気持で皆がいっぱいであろうと察せられる。

ぜひ多くの体験者の証言を一冊の本にまとめてほしいと言ったら、すでにその計画が出来ているようであった。（中略）

各人は各人のことなった体験をした。沖縄戦の実態はこの千差万別の体験をすべて集められなければわからない。それほど深刻で複雑である。ひめゆり学徒隊の行動といってもわずかの体験者の体験ではとても想像もつかない。この度、多くの体験者の証言を数多く集めることができた。『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を補ってくれている。このようにして各女学校の記録のまとめられることを節に希望している。

［1986 年］四月十七日

昨日（昭和六一年四月十六日）、中山良彦君が、本村つるさん宮良るりさん二人に案内されて、訪ねて来てくれた。（中略）彼には職人かたぎがある。いいところである。自分が設計し造ったものは、とことんで自分の満足するものでなければならないと思っているにちがいない。我々も依頼してまかせたからには、最上のものを造ってほしい。

同伴して来た本村さん宮良さんは、資料委員として働いて中山君の気持をよく察しているように見えた。

宮良さんは、平和資料館建設発足に、大きな力になった。東京ひめゆり同窓会支部から、資料館をぜひ造ってほしいと、代表の方々が、わざわざ那覇に来られたことがあった。打会せの会場は、八汐荘。屋良朝苗さんと私も参考人として呼ばれた。地許〔沖縄〕のひめゆり同窓会本部は、すでに育英資金募集を決定しているし、資料館は、運営困難だとして、建設に消極的だった。私も意見を求められた。本部が、運営に難色を示している以上、本部の意見を尊重しなければならないだろうと、資料館建設の希望をおさえた。東京代表は皆不承不承のようだったが、会はそれで閉じられた。宮良さんは郷里八重山の先輩田代秀子さんを案内して八汐荘から帰り、街を歩いた。宮良さんは道々われわれ生き残りの者はぜひ資料館を造りたいと本心を打ち明けた。田代さんはそこで考えなおされた。今日の協議は年寄りばかりの集りではないのか。生き残りの若い者の意見を吸い上げているのかと考えた。東京に帰り、皆と相談しなおされた。若い者の意見を聞きたいと、再び沖縄に来られた。生き残りと仲宗根を加えて協議したいと要求して来た。皆は同窓会館に集った。全員ひとしく平和資料館を熱望した。すでに同窓会では、育英資金の募金が始まっている時であった。さぞかし源同窓会長が困られるだろう。しかし育英資金に別に反対するのではなく、それと平行して平和資料館を建設して行くのだと、源会長にいくぶん遠慮しながらも、御願いして見ることにした。多く会員の意見をよく汲みとる会長は、さっそく理事会にかけて諒承をえた。『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の印税百万円を執筆者の名義で寄附して募金を促した。

田代さんと宮良さんの話し会いがなければ平和資料館はどうなったかと、いつも思う。

あの時、宮良さんはわれが生きている中にできることをしなければどうする。死んで後はその後の人が考えると言ったことばは重い。本村さんと宮良さんを前にしてあの集りのことを思い出した。

私はふだんから一人一人の記録を残してくれることを熱望している。宮良さんが小学校の時から女子師範入学、女子部時代、戦争中自分の歩んで来た道を記録にしつつあると聞いて喜んだ。最初はひめゆりの塔の最後につい口が重くて語らなかった。終戦ずっと後、やっと八重山の新聞にひめゆりの塔の最後のことが書いてあった。さっそく許しをえて、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』にのせて貰った。それから宮良さんは小学校の生徒にも戦争体験を語り高校生にも観光客にも語りかけた。ＮＨＫからも放送した。その体験は、資料館につぐ平和へ貢献することと信じる。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。〔〕は編集で補った。
※旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。
※□は判読不能

本　棚

仲程　昌徳

吉浜忍　『沖縄の戦争遺跡〈記憶〉を未来につなげる』（吉川弘文館）

チビチリガマが少年たちによって荒らされた事件は、多くの人々に衝撃をあたえた。とりわけ地上戦を体験した人々にとっては、やりきれないものがあったといっていいが、少年たちは、その壕で、何が起こっていたかについて、まったく知らなかったという。

事件は、少年たちを、非難するだけにとどまらず、沖縄戦をはじめ、沖縄戦に巻き込まれた人々の動向についての学習内容が問われることにもなった。平和学習を掲げながら、本当にそれが伝わるようなかたちでなされているのか、といった疑問が投じられたのである。

少年たちは、その後、ガマで何が起こっていたかを知り、深く反省し、壕内の整備に懸命であるとの報道がなされ、人々は、胸をなでおろすが、同事件は、改めて、戦争を伝えていくことの大切さを教示するものとなった。

戦争をどう伝えていくか。戦争を知らない世代が圧倒的多数を占めるようになって、それは、大きな問題となって浮上してきたのである。

70 年代以降、県をはじめ各市町村が、戦争体験者からの聞き取り、関連資料の収集等を積極的に行い刊行してきたのは、戦争を忘れず、再び同じような悲劇を繰り返す愚を犯さないという思いから出てきたものであったといっていい。

当初、体験談を収録した刊行物が中心であったが、体験者が少なくなっていくにつれて、それも、変化していくことになる。いわゆる体験者の＜語り＞から＜もの＞の活用へという変化である。そのことを明確にしたのが本書である。著者はそのことについて「体験者が沖縄戦の『記憶』を語ることができるのはあと数年だろう。こうした中、沖縄戦継承がヒトからモノに変わりつつある。モノも沖縄戦の『記憶』をもっている。モノの一つが戦争遺跡である」と指摘していた。

著者はまた「沖縄戦と戦争遺跡」のなかで、「沖縄戦は人（ヒト）やモノに戦争の痕跡を残した。モノの中で代表的なのが戦争遺跡である」といい、戦争遺跡の規定を引いたあと「沖縄では、司令部壕・砲台跡・陣地壕・病院壕・トーチカ・掩体壕・監視哨・秘匿壕・官公庁壕・住民避難壕（ガマ）や弾痕のある石垣や墓など、戦闘に関わる戦争遺跡が多い。しかも沖縄戦では沖縄全域が戦場となったため、戦争遺跡は沖縄各地に広範囲に見られる。沖縄は『戦争遺跡の島』と言えるだろう」と指摘し、さらに続けて「戦争遺跡は戦闘に関わるものだけではない。近代日本の戦争の『遂行過程』で日本軍が造った海軍望楼・中城湾軍需支庫・中城湾臨時要塞、官民が造った監視哨・奉安殿・忠魂碑、御大典や二千六百年記念の記念碑も戦争遺跡である」とつけ加えていた。

本書は、そのような様々な「戦争遺跡」を、「軍事施設（6）」「民間の施設・記念碑（13）」「飛行場（5）」「司令部壕（4）」「砲台（8）」「トーチカ（6）」「陣地壕（4）」「監視所・戦闘指揮所・通信所（7）」「特攻艇秘匿壕（7）」「軍病院壕（3）」「官公庁壕（3）」「御真影奉護壕（3）」「住民避難壕（12）」「収容所（5）」「慰霊の塔・碑（24）」（カッコ内の数字は引用者による）に分類し、それぞれをわかりやすいかたちで紹介している。

本書で取り上げられている「戦争遺跡」は、もちろんその全部というわけではなく「①沖縄戦の実相が見える、②史（資）料や証言の情報が多い、③わりと行きやすい場所にある、④平和教育に資することができることを条件に選択した」ものであるというが、沖縄戦を知るための必要にして十分な選択であるといっていいだろう。

本書は、「三十数年に及ぶ沖縄全域での戦争遺跡の調査・研究、それに戦跡めぐりや平和教育の実践から学んだ戦争遺跡の見方・考え方、これらの成果の集大成である」と述べているように、長年にわたる「戦争遺跡」の調査研究の集大成であり、戦争について実に多くのことを教えてくれるだけでなく、戦争への歩みを止めなければならないという思いをあらたにさせてくれる。

それにつけても、「土地が買収され」「建設部隊と建設資材」が運び込まれ、工事が終了し、「外敵防衛の常備軍が駐屯した」（「与那原町の中城湾臨時要塞」の項）といった箇所を読むと、今沖縄各地で始まっている不穏な動きと重なり、再び同じような悲劇を繰り返す愚を犯しているのではないかと思われ、暗澹たるものがある。

30 周年に寄せて ―証言員の声―

５代目館長　本村つる／開館の日、『過去帳』を持参しました。仲宗根政善先生がお金を出して、紙を本土から取り寄せ、亡くなった一人一人の名前を書いたものです。とにかく気持ちを込めて、一人一人の名前を書きました。開館の日の早朝、第四展示室のジオラマのそばに納めたときの状況は今でも鮮明に覚えています。資料館が開館してみんな証言員として頑張ってきました。だんだん歳を重ねて、いつの間にか 30 年という気持ちです。元気なうちに若い人に無事にバトンタッチすることが出来て、安心しています。世の中が変わって、戦争のことを知らない人が増えますが、どう伝えていくかが皆さんの使命です。頑張って下さい。

７代目館長　島袋淑子／（開館の日）雨が降っていましたよ。亡き友の嬉し涙かな、悲し涙かなと思いました。ご遺族に何と言われるか心配したけど「あなたたちがいるから資料館ができて､娘のことがわかったよ。ありがとうね」と言われた時、初めて、生きていてもいいんだと思いましたね。

資料館は「平和の砦」。世の中がどんなに変わっても、戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、命の大切さを知らせたいと作ったので、ひとりでも多くの人に資料館の理念を知ってほしいと思います。次世代の人も育っているのでもう大丈夫と信じています。

証言員　津波古ヒサ／「亡くなった友達のことを伝えたい」「とにかく戦争のことをみんなに知らせないと」という思いでみんなで一生懸命つくった資料館。開館の日は「やったー！」という喜びが大きかったですね。あれからたくさんのお客さんがいらして、みんなが分かってくれたという思いがあります。戦争があったことをみんなに知らせるということが、生き残った私たちの希望。資料館を作って良かったと思っていますよ。私たちがいなくなっても、戦争をわかるように展示して、ずっと続けて受け継いでくれる人たちがいることに感謝しています。

証言員　仲里正子／亡くなった友達のことを思い、戦争を起こしてはいけないという思いで作った資料館。命の大切さ、平和の大切さ、「ひめゆりの心」を若い人たち、たくさんの人たちに伝えることができる、と心のなかに熱い思いを持って展示室に立っています。あっという間の 30 年でした。

（開館の日の）雨は「伝えてくれてありがとう」という亡くなった友達の嬉しい涙だと感じました。亡くなった人たちの思いも、戦争の大変さもこれで伝わる、という思いでした。みんなで力を合わせてきた資料館。これからも続いていくと期待しています。

証言員　謝花澄枝／同郷の嶺井百合子先生（当時同窓会副会長）に声をかけられ、少し遅れて証言員を始めました。あっという間に時間がたったという思いです。途中病気で休むこともありましたが、復帰できたときはとても嬉しかったです。来館者に戦争の話をしているときは、今でも、砲弾の中にいるような、そんな感じがします。戦争を忘れてしまうと、平和の大事さも忘れてしまうのではないかと思います。二度とああいう戦争はやってはいけない。資料館は、ずっと平和であるように、戦争があったということを、いつまでも若い人たちに伝え続けてほしいと願っています。

証言員　知念淑子／開館準備の頃はまだ若かったし「とにかくやるしかない」という気持ちでした。自分たちで動くことを厭わず活動できたのは、女性だからこそだと思います。開館当日は、備品の準備も間に合ってない状態で「トイレットペーパーがない」「ボールペンがない」と大変でした。

開館の嬉しさももちろんあるけど、亡くなった人のことも思い出されて、もう悲喜こもごもでした。今では、次世代の若い人たちがバトンタッチしてくれたから、資料館も大丈夫だと思っています。今まで資料館がやってきたことを継いでくれればと願います。

資料館ガイド

◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約 45 分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、ＦＡＸかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】9：00　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00　16：00

※ビデオ作品　○証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」（25 分／ 1994 年）
　　○アニメ「ひめゆり」（30 分／ 2012 年）

※年末年始（12 月 30 日、31 日、 1 月 1 日～ 3 日）・旧盆（旧暦 7 月 13 日～ 16 日）は、講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（ 6 月 21 日～ 24 日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

＊資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

＊ホールの収容人員は約 200 人（席）です。

＊多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

＊予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

◆ＶＴＲ室のご利用について

証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」とアニメ「ひめゆり」等の映像作品を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前 9 時～午後 5 時（閉館は午後 5 時 25 分）　②休館日　年中無休

③入 館 料　大人￥310　高校生￥210　小・中学生￥110

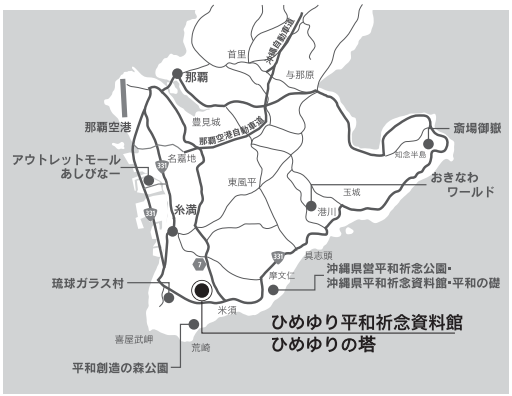
　　団体料金（20 名以上一括）大人￥280　高校生￥190　小・中学生￥100

④交　　通

【路線バス】旭 橋・那覇バスターミナルから〔89 糸満線〕で 約 30 分、糸満バスターミナルで〔82 玉泉洞糸満線〕に乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約 4 分、赤嶺駅前（糸満･豊崎向け）バス停で〔89 糸満線〕に乗車し約 20 分。糸満バスターミナルで〔82 玉泉洞糸満線〕に 乗り換え約 15 分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第 63 号
2019（令和元）年 5 月 31 日発行
編集・発行　公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館
〒 901 - 0344　沖縄県糸満市字伊原 671 - 1　　☎ 098 - 997 - 2100　Fax 098-997-2102
URL：http://www.himeyuri.or.jp/　Facebook https://www.facebook.com/HIMEYUIRI.PEACE.MUSEUM/